

**[A年] 聖霊降臨節第11主日(2021年8月1日)****【旧約聖書日課】 ヨナ書 3章1～5節**

1主の言葉が再びヨナに臨んだ。

2「さあ、大いなる都ニネベに行つて、わたしが  
お前に語る言葉を告げよ。」

3ヨナは主の命令どおり、直ちにニネベに行つた。ニネベは非常に大きな都で、一回りするの  
に三日かかった。4ヨナはまず都に入り、一日分  
の距離を歩きながら叫び、そして言った。「あ  
と四十日すれば、ニネベの都は滅びる。」5すると、ニネベの人々は神を信じ、断食を呼びかけ、  
身分の高い者も低い者も身に粗布をまとった。

**【使徒書日課】 使徒言行録 9章26～31節**

26サウロはエルサレムに着き、弟子の仲間  
に会おうとしたが、皆は彼を弟子だとは信じな  
いで恐れた。27しかしバルナバは、サウロを連れ  
て使徒たちのところへ案内し、サウロが旅の途  
中で主に出会い、主に語りかけられ、ダマスコ  
でイエスの名によって大胆に宣教した次第を説  
明した。28それで、サウロはエルサレムで使徒た  
ちと自由に行き来し、主の名によって恐れずに  
教えるようになった。29また、ギリシア語を話す  
ユダヤ人と語り、議論もしたが、彼らはサウロ  
を殺そうとねらっていた。30それを知った兄弟  
たちは、サウロを連れてカイサリアに下り、そ  
こからタルソスへ出発させた。31こうして、教会  
はユダヤ、ガリラヤ、サマリアの全地方で平和  
を保ち、主を恐れ、聖霊の慰めを受け、基礎が  
固まって発展し、信者の数が増えていった。

**【福音書日課】**

マタイによる福音書 9章35節～10章16節

9 35イエスは町や村を残らず回つて、会堂で教  
え、御国の福音を宣べ伝え、ありとあらゆる病  
気や患いをいやされた。36また、群衆が飼いな  
い羊のように弱り果て、打ちひしがれている  
のを見て、深く憐れまれた。37そこで、弟子た  
ちに言われた。「収穫は多いが、働き手が少な  
い。38だから、収穫のために働き手を送ってくだ  
さるように、収穫の主を願いなさい。」

10 1イエスは十二人の弟子を呼び寄せ、汚れ  
た霊に対する権能をお授けになった。汚れた霊  
を追い出し、あらゆる病気や患いをいやすため  
であった。2十二使徒の名は次のとおりである。  
まずペトロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデ  
レ、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネ、3フ  
ィリポとバルトロマイ、トマスと徴税人のマタ  
イ、アルファイの子ヤコブとタダイ、4熱心党の  
シモン、それにイエスを裏切ったイスカリオテ  
のユダである。

5イエスはこの十二人を派遣するにあたり、次  
のように命じられた。「異邦人の道に行つては  
ならない。また、サマリア人の町に入つてはな  
らない。6むしろ、イスラエルの家の失われた羊  
のところへ行きなさい。7行つて、『天の国は近  
づいた』と宣べ伝えなさい。8病人をいやし、死  
者を生き返らせ、重い皮膚病を患っている人を  
清くし、悪霊を追い払いなさい。ただで受けた  
のだから、ただで与えなさい。9帯の中に金貨も  
銀貨も銅貨も入れて行つてはならない。10旅に  
は袋も二枚の下着も、履物も杖も持つて行つて  
はならない。働く者が食べ物を受けるのは当然  
である。11町や村に入つたら、そこで、ふさわし  
い人はだれかをよく調べ、旅立つときまで、そ  
の人のもとにとどまりなさい。12その家に入つ  
たら、『平和があるように』と挨拶しなさい。13家  
の人々がそれを受けるとにふさわしければ、  
あなたがたの願う平和は彼らに与えられる。も  
し、ふさわしくなければ、その平和はあなたが  
たに返ってくる。14あなたがたを迎え入れもせ  
ず、あなたがたの言葉に耳を傾けようとしな  
い者がいたら、その家や町を出て行くとき、足  
の埃を払い落としなさい。15はつきり言つてお  
く。裁きの日には、この町よりもソドムやゴモ  
ラの地の方が軽い罰で済む。」

16「わたしはあなたがたを遣わす。それは、狼  
の群れに羊を送り込むようなものだ。だから、  
蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい。

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## ヨナ書 3章1～5節

1主の言葉が再びヨナに臨んだ。2「さあ、立って、あの大きいなる都ニネベに行き、私があるに語る宣告を告げよ。」3ヨナは立って、主の言葉に従い、ニネベへと向かった。ニネベは非常に〔直訳→神にとって〕大きな都で、一回りするのに三日かかった。4ヨナはまず都に入り、一日かけて歩き、「あと四十日で、ニネベは滅びる」と告げた。5すると、ニネベの人々は神を信じ、断食を呼びかけ、大きな者から小さな者に至るまで粗布をまとった。

## 使徒言行録 9章26～31節

26サウロはエルサレムに着き、弟子の仲間に加わろうとしたが、皆は彼を弟子だとは信じていないで恐れた。27しかしバルナバは、サウロを引き受けて、使徒たちのところへ連れて行き、彼が旅の途中で主に出会い、主に語りかけられ、ダマスコでイエスの名によって堂々と宣教した次第を説明した。28それで、サウロはエルサレムで弟子たちと共にいて自由に出入りし、主の名によって堂々と宣教した。29また、ギリシア語を話すユダヤ人と語り、議論もしたが、彼らはサウロを殺そうと狙っていた。30それを知ったきょうだいたちは、サウロを連れてカイサリアに下り、そこからタルソスへ送り出した。

31こうして、教会はユダヤ、ガリラヤ、サマリアの全地方で平和のうちに築き上げられ、主を畏れて歩み、聖霊に励まされて、信者の数が増えていった。

## マタイによる福音書 9章35節～10章16節

9 35イエスは町や村を残らず回って、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、ありとあらゆる病気や患いを癒やされた。36また、群衆が羊飼いのいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた。37そこで、弟子たちに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。38だから、収穫のために働き手を送ってくださるよう、収穫の主に願いなさい。」

10 1イエスは十二人の弟子を呼び寄せ、汚れた霊に対する権能をお授けになった。汚れた霊を追い出し、あらゆる病気や患いを癒やすためであった。2十二使徒の名は次のとおりである。まずペトロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレ、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネ、3フィリポとバルトロマイ、トマスと徴税人のマタイ、アルファイの子ヤコブとタダイ、4熱心党のシモン、それにイエスを裏切った〔直訳→引き渡した〕イスカリオテのユダである。

5イエスはこの十二人を派遣するにあたり、次のように命じられた。「異邦人の道に行ってはならない。また、サマリア人の町に入ってはならない。6イスラエルの家の失われた羊のところへ行きなさい。7行って、『天の国は近づいた』と宣べ伝えなさい。8病人を癒やし、死者を生き返らせ、規定の病を患っている人を清め、悪霊を追い出しなさい。ただで受けたのだから、ただで与えなさい。

9帯の中に金貨も銀貨も銅貨も入れてはならない。10旅には袋も二枚の下着も、履物も杖も持って行ってはならない。働く者が食べ物を受けるのは当然である。11町や村に入ったら、そこで誰がふさわしい人かを調べて、旅立つときまで、その人のもとにとどまりなさい。12その家に入ったら、『平和があるように』と挨拶しなさい。13その家がふさわしければ、あなたがたの願う平和がそこを訪れるようにしなさい。ふさわしくなければ、その平和があなたがたに返ってくるようにしなさい。14あなたがたを受け入れず、あなたがたの言葉に耳を傾けようもしない者がいたら、その家や町を出て行くとき、足の埃を払い落とすなさい。15よく言うておく。裁きの日には、この町よりもソドムやゴモラの地の方が軽い罰で済む〔直訳→耐えやすい〕。」

16「わたしがあなたがたを遣わすのは、狼の中に羊を送り込むようなものである。だから、あなたがたは蛇のように賢く、鳩のように無垢〔別訳→素直〕でありなさい。」

**黙想のためのノート****次主日教会暦と聖書日課について**

・8月1日「聖霊降臨節第11主日」の日課主題は「宣教への派遣」。福音書日課は、「マタイ福音書」から十二弟子の宣教派遣に伴う教えの箇所。使徒書日課は、「使徒言行録」から、回心を経験したサウロ(パウロ)が、エルサレム教会でバルナバのとりなしによって受け入れられて宣教活動を始めたことを伝える逸話。旧約日課は、「ヨナ書」から、預言者ヨナが神の二度目の命令に従ってニネヴェで神の裁きを告げた場面。いずれも、宣教そのものについてよりも、宣教派遣される者に焦点が当てられている。

・8月第一主日は、教団行事暦の「平和聖日」。主日礼拝は、これに沿って整えられる。

**旧約日課(ヨナ3章より)**

・「ヨナ書」は、「十二小預言書」の第五巻に置かれた、もっぱら「預言者ヨナのニネベ宣教記」の物語形式で記された異色の預言書。「預言者ヨナ」は、本預言書の冒頭にあるのと同様の「アミタイの子ヨナ」の名で、「列王記下」14:25に登場しており、前8世紀、イエフ王朝ヤロブアム王治世下の北王国で活動した預言者として伝えられている。この時代は、新アッシリア帝国が軍事展開をしてオリエント世界の覇権を握り始めていた時代であったが、一時的にメソポタミア南部地方の紛争に手こずったアッシリアが影響力を落とした時期でもあった。そこに登場した北王国ヤロブアム王は、40年を超える治世の時代に経済的発展を成し遂げ、支配領域も北王国史上最大判図を誇るまでになっていた。「列王記」の伝える「預言者ヨナ」は、このヤロブアム王時代の北王国の繁栄を主の御心として肯定する預言を語る「イスラエル至上主義」の預言者として描かれている。「ヨナ書」の「預言者ヨナ」も、基本的なスタンスは「イスラエル至上主義者」として描かれているが、本人の意向に反して、神の命令でアッシリアの首都ニネベに宣教派遣される。その結果、ニネベの人々が悔い改めて神へ立ち帰ったとする「ヨナ書」は、歴史的に知られた「預言者ヨナ」の「イスラエル至上主義」に対して、「普遍主義」神学の立場から異論を示すものとなっており、「預言者ヨナ」の同時代に著された「預言者の書」ではなく、後代(おそらくバビロン捕囚期以後)になって創作された「預言者物語」であろうと考えられている。「普遍主義」神学は、「第二イザヤ」の後半(56章以下)などで明瞭に見られる。

・「ヨナ書」は、二重の「悔い改め物語」として構成されている。第一には、ヨナが遣わされる「ニネベの人々」の悔い改めであり、第二には、「預言者ヨナ」の悔い改めである。「悔い改め」は、「神の言葉」に促されて起こることとして描かれるが、「ヨナ書」は、「預言者ヨナ」の悔い改めのほうが困難であったとしており、「イスラエル至上主義」に対する批判的視点が強い。

**使徒書日課(使徒9章より)**

・「使徒言行録」は、「ルカ福音書」の続編として編纂された「初代教会年代記」であるが、厳密な歴史記録として記されたというよりは、すでに第一世代の信者がいなくなる時代に突入して、「教会」の本来のあり方を理想として描き出して見せることを目的に著されたと考えられる。

・「ルカ福音書」および「使徒言行録」は、一貫して、「神の国」宣教が世界に拡大していくというヴィジョンの中で展開されている。「神の国」宣教は、当初、主イエスひとりによって始められ、それが十二弟子、七十二人の弟子、復活を信じて聖霊降臨を経験した120人の弟子、洗礼によって加えられた多くの弟子たちと拡大し、さらに地理的にもユダヤ地方からサマリア地方、シリア地方、地中海世界全域へと拡大していく様子が、順に描かれていく。いくつかの分岐点の一つとして、異邦人への宣教拡大が「使徒言行録」8章から描き始められ、9章に登場するサウル(パウロ)の目覚ましい働きによって確固とした異邦人宣教の地歩が築かれたとされるのである。

・日課箇所は、そのサウロが、教会迫害者から百八十度立場を変え、洗礼を受けた信者として宣教活動へと導かれていく初期の様子を描く箇所。彼の宣教活動は、バルナバのとりなしによりエルサレム教会で使徒らの承認を得ることで正統なものとして扱われるが、「ギリシア語を話すユダヤ人」から迫害を受けることになり、「タルソス」に隠棲したとされている。このあたりの事情について、パウロ自身が「ガラテヤの信徒への手紙」1:13以下で詳述している。「ギリシア語を話すユダヤ人(ヘレニスタイ)」は、初代エルサレム教会で当初から信者として加わっていたことが知られるが(使6:1)、ここでは、信者の「ギリシア語を話すユダヤ人」を指すのか、一般的に異邦暮らしをしていて「ギリシア語を話すユダヤ人」を指すのか、明瞭でない。パウロ自身も「タルソス出身」(使9:11)と言われているように、ほぼ間違いなく「ギリシア語を話すユダヤ人」でありながら、「熱心なユダヤ教徒」を自称して教会迫害に加担していた。実際、外国暮らしのユダヤ人の中には、ユダヤ地方のユダヤ人よりも過激な愛国主義・ユダヤ主義の者たちがいたと推認され、元来サウロ(パウロ)を「熱心なユダヤ教徒」の仲間と考えていた「ギリシア語を話すユダヤ人」らが、サウロの裏切りを知って彼を殺そうとねらい始めた、ということかもしれない。あるいは、使徒らの承認を得たとしてもなお、サウロを仲間として認めることをためらっていた信者たちの中に、彼を排除しようと動くグループがあったということも考えられるが、いずれにしても推測の域を出ない。「使徒言行録」著者は、「異邦人の使徒」としてのパウロが、協力者として最も期待しうる「ギリシア語を話すユダヤ人」から攻撃されていたということを描き、彼の宣教の困難さを示そうとしているのかもしれない。

## 福音書日課(マタイ 9-10 章より)

・日課箇所は、主イエスが十二人の弟子を選ばれて「使徒」とされ、宣教へと派遣するに際して教えられた教えがまとめられた箇所。共観福音書が共通して伝えているが、「マルコ」や「ルカ」が異なる文脈に配置している教えを、「マタイ」はこの教えの中に集約し、「宣教派遣説教」としてまとまりのある教えを構成させている。この箇所は、①宣教への動機づけと祈り、②十二人の任命、③派遣説教、という三段階で展開している。さらに、派遣説教は、日課箇所(および次主日日課箇所)を越えて 10 章末まで続く。派遣説教中、日課箇所が扱うのは、共観福音書でほぼ並行記述が確認される部分までである。

・主イエスが十二人の弟子を選び宣教派遣する動機は、「群衆が飼い主のいない羊のように弱りはて、打ちひしがれている」ことに対する「憐れみ(スブラングニゾマイ)」にある。ここで「憐れまれた」と訳される「スブラングニゾマイ」は、「心(腹)を痛める」という語意の単語で、マタイが繰り返し引用するホセアの預言「わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない」で用いられる「憐れみ(エレオス)」とはニュアンスが異なる。英語訳では、通例、語意に沿って「コンパッション」(「共に苦しむ」の意)の語が充てられる。

・十二人の選びは、端的に「汚れた霊に対する権能授与」として提示されている。「権能」は、「権威」とも訳される「エクスーシア」。日本語の「権威」という意味合いよりも、「正統性／権利」およびそれに基づく「力」を指し示す語。「山上の説教」の結部で福音書記者が主イエスについて「権威ある者としてお教えになった」と評しており、続く「百人隊長の僕のいやし」の記事でも、百人隊長の「権威」に対する認識が「信仰(ピステイス)」を基礎づけるものとして主イエスにより評価されている。「権威」授与は、「お墨付き」を得て力を行使することではなく、「信頼関係に基づく代理人」として派遣され、行動することを意味するのである。

・宣教派遣説教を、「マタイ」は、異邦人伝道を禁じるどころから記し始めている(5~6 節)。この宣教制限命令は、「マルコ」や「ルカ」の並行箇所には見られない「マタイ」独自の挿入である。同様の趣旨のことを、主イエスは「カナンの女の娘の癒し」の出来事の中でも語られていたと描いているので(マタイ 15:24)、「マタイ」は、公生涯中の主イエスが宣教対象をユダヤ人(イスラエルの失われた羊)に限定することを原則としていたと明確に理解しているのだろう。しかし、同じ「マタイ」が、復活後の主イエスの「大宣教命令」では、「行って、すべての民をわたしの弟子とせよ」(マタイ 28:19)と命じたとしている。おそらく、「マタイ」は、主イエスの「十字架死と復活」を転換点として、「ユダヤ人」の枠組みが打ち破られ、主イエスの「天の国」宣教が普遍的なものとして開かれていった、と理解しているのだろう。

## 来週の誕生日 (8月1日~6日)

## 主日礼拝の讃美歌から

- ・21-15 番「みことばにより」。20 世紀のイギリスでは最も広く歌われた讃美歌の一つとされる。作詞の J. モンゴメリーは 18 世紀後半にイギリスでモラヴィア兄弟団の伝道者の家庭に生まれ育ち、19 世紀にかけて文筆家・新聞編集者として活躍しながら讃美歌の作詞活動をした人物。
- ・こどもさんびか-34 番「キリストのへいわ」は、音大を卒業して学校教師を経た後に献身したカトリック司祭・塩田泉の作詞作曲。コロサイ 3:15 から着想。
- ・21-423 番「人がこの世界に」は、現代オランダの讃美歌作家オースターハウスが作詞し 1973 年出版のオランダ讃美歌集に発表で、ドイツ語版も歌われている。曲は、現代オランダの音楽家オーエンス=ヴァンシンの作曲で、南米音楽の影響を受けている。
- ・21-92 番「主よ、わたしたちの主よ」は、『讃美歌 21』編纂に合わせて実施された公募により生まれた讃美歌。礼拝に呼び集められた「わたしたち」がこの世へと遣わされる者とされていることを歌う。作詞の佐久本正志は、沖縄出身の教団牧師。作曲の鈴木千恵子はカンバーランド長老教会高座教会員の音楽家。

## 21-15「みことばにより」

## Songs of Praise the Angels Sang

1. Songs of praise the angels sang, / heaven with alleluias rang, / when creation was begun, / when God spake and it was done.
2. Songs of praise awoke the morn / when the Prince of peace was born; / songs of praise arose when he / captive led captivity.
3. Heaven and earth must pass away; / songs of praise shall crown that day: / God will make new heavens and earth; / songs of praise shall hail their birth.
4. And shall we alone be dumb / till that glorious kingdom come? / No, the church delights to raise / psalms and hymns and songs of praise.
5. Saints below, with heart and voice, / still in songs of praise rejoice; / learning here, by faith and love, / songs of praise to sing above.
6. Hymns of glory, songs of praise, / Father, unto thee we raise, / Jesu, glory unto thee, / with the Spirit, ever be.

## 21-423「人がこの世界に」

## Zolang er mensen ziji op aarde